

## うちの子育てはおおむね失敗する話 ①

～愛情表現編～

息子が小さいころ。「お母さんの得意料理は何ですか？」と授業で聞かれ、他の子は「卵焼き」とか「スパゲティ」などと答える中、何とわが息子、元気よく「手抜き料理です!」と答えたそう。

このおもしろい授業のエピソードは人から人へと伝播。そして、市中に網を張っていた母の耳に入る。母から私に、私から妻に。

これを聞いて私は、息子の笑いのセンスの良さ、いや天然ぶりに脱帽。妻はもちろん激怒。その激怒が私のツボにはまる。妻が怒れば怒るほど笑いが止まらない…。

20年経った今、この話は妻の持ちネタの一つのようになっていますが、あの時は確かに本気で怒っていました。

今さらですが妻の名誉のために付け加えますと、妻の手料理は結構いけます。レパートリーは広く、食材や調理方法に関する知識もある。ただ、食卓に並べる時の一言が「今日も手抜き料理!」とか「必殺の手抜き料理!」でした。

そもそも、うちの妻<sup>ヤンキー</sup>は自慢や自惚れが大嫌い。巧言令色を退け等身大で勝負する「男前」な性格。だから、自分が作ったものに対して「おいしくできた」とか「かわいく盛り付けた」とは絶対に言わない。そんな妻が自身の料理を「手抜き料理」だと言っても、私に違和感はありません。さらに言えば、「もっと手の込んだおいしいものを作ってあげたいけど、時間がなくてごめん。」という言外の言葉が私には聞こえています。だから私は妻の手料理を一層おいしく感じるし、いつもコストパフォーマンスが高い料理だと感心もします。また実際は、自ら「手抜き」という割には、夜遅くに次の日の仕込みをすることがよくありました。

「子供には間接的な愛情表現は伝わらない。」とは、ある児童心理の専門家の言葉です。確かにその通りだと納得できます。そして、この言葉の裏を返せば、「**子供には表現がそのまま伝わる。**」ということになります。

普段の妻の料理は手の込んだものが少ない。しかしそこは、仕事をしながら家事をしているのだから当然…と大人にはわかる。それから、「手抜き」という言葉の背後にあ

る「思い」や「陰の努力」も、大人ならわかるはず。でも、子供にはわからない。見えるもの聞こえるものに愛情を感じるのが子供の子供たる所以。「手抜き料理」と言われれば、「そうか、これは手抜き料理なんだ。」とそのまま受け止める。そして、20分で作る料理よりも60分かけた料理の方に愛情が込められていると短絡する。

だから親は、『自分の子供時代もこうだった』とか、『大人になったらわかる』などと問題の先送りをしてはいけない。それから、子育てはみんなが初心者なのに『わたし(たち)はこれだけやっている。』などと自惚れてはいけない。さっさと先輩に助言を求め、人の助けを借りる。そして目の前にいるわが子を丸ごと理解し、大切なことを伝える努力をする。だって子供は、いいことも悪いことも、いい言葉も悪い言葉も、そのまま全部吸収して自分を作っていくのだから。

さて、妻にとっては笑い事ではない事件でしたが、うちの子育て全般を考え直すきっかけになりました。たとえば、

- ① 逆説表現や回りくどい表現はやめて、子供に伝わりやすい素直な表現をする。そして、ちゃんと伝わったかどうか子供の反応を見て確かめる。
- ② 見えるものには背景や思い、そして陰の努力があるということをお子にわからせる。
- ③ 父子で過ごす時間と父の家事量を増やすため、父と息子が普段から家事に関わるようにする。

そもそも何でお母さんの得意料理なんだという気持ちがあった私は、これを機会に息子と一緒にする家事を増やしました。中でも息子と料理を作るのがとても楽しくて、一緒に作ってはその出来栄を二人で自画自賛していました。ところが、これがまた更なる喜劇を生むことになろうとは……まったく、子供というのは油断がならない……。

(いつかへつづく)